

「行春や鳥啼き魚の目は泪」の教材解釈についての一試案

大河原 清

一、はじめに

芭蕉の俳句の一つである「ゆく春や鳥なき魚の目はなみだ」の解釈を、理解という立場で行ってみた。私の地元、岩手県には岩手山がある。東北新幹線の盛岡駅を降りると、北方に二〇三八メートルの岩手山が見える。この岩手山は別名、岩鷲山、ガンジュサン、またはガンシウザンと呼ばれる。雪解けの春先、四月中旬頃になると、雪解けに伴って、岩肌に鷲が羽を広げた形が見えるからである。ここで、岩肌に鷲が羽を広げた形が「現れる」とはせずに、「見える」と表現したのは、見る者がすでに鷲という鳥が羽を広げた形を知っている、少なくとも、鷲が羽を広げた形・イメージを持っていることを前提としている。

同じように、「ゆく春や鳥なき魚の目はなみだ」の意

味を理解するためには、ある知識を知っているということとを前提にして、はじめて可能になるのではないかと思われる。対象とする言葉の意味を理解するために、前提となる知識として鳥や魚についての漢詩における意味を知っていることを例示するために、「ゆく春や鳥なき魚の目はなみだ」の解釈を試みた。その結果、「魚の目」と繋いで詠むのではなく、むしろ「魚の」で一端区切り、「目は涙」とすることで、涙を流したのは芭蕉自身であるということ強調した。

二、従来の解釈について

『奥の細道』に「行春や鳥啼き魚の目は泪」の句がある。芭蕉が千住を旅立つにあたって詠んだ句である。この句の解釈は次の通りである。小学生向け、高校生向け、大

学生向け、そして一般読者向けの資料をここでは引用する。(なお以下において引用が長くなるのは、正確を期すためであることを、あらかじめお断りしておきたい)。

二、一 小学生向け図書の場合

「ゆく春や鳥なき魚の目はなみだ

春は、もう去っていかうとしています。しかし、去っていく春をおしむ気もちは、人間ばかりでなく、無心の鳥や魚だっておなじとみえます。ごらんなさい。春とともに、みなさんがたとわかれをつけようとしているわたしたちの目からみれば、鳥も魚も、春をおしんでなみだをながしているように思えますよ……という意味です。」(小倉肇 一九八三 少年少女伝記読みもの松尾芭蕉 さ・え・ら書房 一二八頁)

二、二 高校生向け教科書解説の場合

「春は過ぎ去ろうとしているが、それを惜しんで鳥も鳴き、魚の目にも涙がうるんでいるようだ。」課題の解説には課題として「『行く春や・・・』の句にはどのような思いが込められているか、考えてみよう。」とあり、そのヒントには「前後の文章を参考にし、特に作者自身

が『涙をそそ』いでいる点に注意する。」とある。解答例では「春を惜しむ鳥や魚に託して、作者自身が旅立ちに際して抱いている、遥かな前途への不安や、親しい人々との別れの悲しさが込められている。」(三省堂編集所編 一九九九 三省堂版教科書学習高等学校古典Ⅰ古文編(発行元 三省堂・発売元 朋友出版) 二二二―二二三頁)

二、三 大学生向け総合国語便覧の場合

「行く春や鳥啼き魚の目は涙(奥の細道・春)

春のゆくころ、旅立ちのため友人と別れようとしていると、鳥も悲しげに鳴き、魚の目も涙にうるんでいるようだ。」(稲賀敬二・竹盛天雄・森野繁夫監修 一九七八 増補改訂新訂 二〇〇三 総合国語便覧 教育図書出版 第一学習社 一六六頁)

二、四 一般読者向け図書の場合(一)

「行春や鳥啼き魚の目は泪

この句は、『行く春』が季題である。春がもう去って行くかうとしているが、去り行く春の愁いは、人間ばかりでなく、無心な鳥や魚までも感ずると見え、鳥は悲しげ

になき、魚の眼には涙があふれているようだ、という意味で、去り行く季節のあわれと同時に、人々との離別の悲しみが籠められている。」(井本農一 一九六八 芭蕉Ⅱ その人生と芸術 講談社現代新書 一四四頁)

二、五 一般読者向け図書の場合 (二)

「行春や鳥啼き魚の目は泪

(春の行く季節に、自分も遠く旅立つて行く。行く人も送る人も、離別の悲しさはひとしおだが、行く春の悲しさに、無心の鳥も啼き、魚も目に泣しているようである。)

・ ・ ・ (引用者が途中を省略する)

千住は奥羽街道の第一の宿場で、道の左右には旅亭や商家が軒を並べ、旅人の往来が絶えなかった。毎朝、近郷の人たちがやってきて、五穀や野菜や川魚などの市が立った。深川から送ってきた親しい人たちとは、ここで別れるのである。

前途何千里の思いが胸にふさがって、『幻のちまた』に離別の涙をそそいでいたと、書いている。いまの旅行とちがって、たいへんな決意でかけたのである。このとき作った人々への留別の句が、『行く春や』の句である。

時はちようど弥生の終わりであるから、惜春の感じを詠んでいる。それに、もちろん惜別の情がかさなっている。

『鳥啼き魚の目は泪』というのは、激しい表現である。魚鳥は、このとき目にし、耳にしたのだろう。

魚は千住の魚市で見たのだろうと、むかしから説があり、滝井孝作氏は、舟でくるとき隅田川で見たのだろうといっている。この句のイメージとしては、生きた魚鳥でなければなるまい。だが、この句の魚鳥は、同時に象徴的な芭蕉の脳裏の風景でもある。

行く春の別れには、花も涙をそそぎ、鳥も心を驚かすと、杜甫は詩にうたっている。また、崇徳院の歌に『花は根に鳥は古巢に帰るなり』というのがある。この歌は『大菩薩峠』でも、間の山のお玉によって繰り返し哀愁ふかく歌われる。こういう詩や歌をもとにして、芭蕉はこの惜春の句を作ったというのではない。だが、そういう伝統的な発想が、まったくなかったとも言いきれない。あるいはまた、動物たちが啼泣している釈尊涅槃図も、芭蕉の意識にあったかもしれない。

だが、とにかく、この句のリズムの波の起伏はすばらしい。一句の地色も、またすこぶる濃淡の変化に富んで

いる。」(山本健吉(鈴木勤編) 一九七五 奥の細道／日本の古典II グラフィック版 世界文化社 一四、一六頁)

以上の通り、この句については一様に魚の目に涙が流れているという解釈が主流であることがわかるだろう。

三、なぜに「魚の目は泪」なのであろうか

「行春や鳥啼き魚の目は泪」における「魚の目は泪」については、奇抜な表現としてこれまでいくつか論じられてきた。

「行春や鳥啼き魚の目は泪」の句のなかの「魚の目は泪」から、魚が涙を流すという表現が、私には奇異に感じられる。詩人は魚の目は泪を流しているように感じられるので、違和感は少ないという。しかし、私にはこの解釈がどうしても納得がゆかない。多くの解釈は、この句の読み方を、「行春や 鳥啼き 魚の目は泪」の通り、「鳥啼き」と「魚の目は泪」のように区切ることで、そのように解釈しているのではないかと思うのである。

四、「魚の目は泪」についての内山(一九七六)の整理

内山は近代の人々だけの説を次の通り整理している。

- 一 魚目は涙目である。(山口誓子「実作者の言葉」)
 - 二 千住の魚市を見た。(志田義秀「奥の細道評釈」)
 - 三 魚の目というものはいつも泪をためているようならんだものだから泪といったのは巧みである。(荻原井泉水「奥の細道評論」)
 - 四 店先にならべてある魚を見たのかもしれない。(小宮豊隆「芭蕉研究」)
 - 五 釈迦涅槃図にいろんな動物が啼泣しているところを高浜虚子が連想している。(山本健吉「芭蕉」(内山一也 一九七六 鑑賞奥の細道 笠間書院 一八一―一九頁)
- このような整理を踏まえて、内山は「芭蕉の心にはやはり、その底に杜甫や陶淵明の詩が流れていて、その惜別の情を魚鳥に託するという頼原退蔵説の方がまだいいと思う。」(一九頁)と述べている。その末尾においても「頼原退蔵説『惜別の情を魚鳥に託する』というところに落ちつくようである。」(二〇頁)と結んでいる。私も

惜別の情を魚鳥に託するというこの内山氏の結論に同意する。

五、問題意識と私なりの解釈の視点（句切りの問題）

前述した頼原・内山説に同意することで、次に、私なりの解釈の視点を述べることにする。私はこの発句「行春や鳥啼き魚の目は泪」は、「行春や 鳥啼き魚の 目は泪」の通り、「鳥啼き魚の」と「目は泪」とに区切ることのほうが、意味をより素直に解釈できるのではないかと思うのである。あるいは、三行書きに表示することで、解釈がより納得の行くものになるのではないかと思うのである。

「行春や

鳥啼き魚の・・・（郷愁の想いで芭蕉が絶句した状態を示す）

態を示す）

目は泪」

私の興味関心は、一つの句でさえも、前提となる知識を踏まえてこの句は作られたのではないかと思うのである。前述した頼原・内山説に同意した通りである。それ

が芭蕉の漢詩についての知識であろうと推測されるのである。漢詩にこだわる必要は無いとする意見もあるが、その場合には、鳥や魚についての言及は、どのように説明されるのであろうか。

六、漢詩の影響

前述の区切りから、「鳥啼き魚の」は、単純に漢詩にある鳥や魚の郷愁を思うことととらえても良いのではないかと思う。

六、一 句の出所

句の出所については内山（一九七六）は「1 古詩を典拠とするという説。2 典拠は全くないとする説。3 参考の程度に考えればよいとする説。」（一八頁）と述べている。

1の古詩の場合について、山本（一九五九、二五八頁）が挙げている三つは次の通りである。

- 1 『古楽府』の「古魚過河泣、何時復還入」
- 2 杜甫の「春望」の詩句「感時花濺淚、恨別鳥驚心」
- 3 陶淵明の「帰田園居」の詩句、「羈鳥戀舊林、池魚

思故淵

このほか『奥細道菅菰抄』（萩原 一九七九、一六七頁）では

4 『文選古詩』の「王鮪懷河岫、農風（鷹ヲ云）思北林」を挙げています。

これらの漢詩の中から、私は陶淵明の「田園の居に帰る」に依拠したい。「羈（羈）鳥は旧林を恋い、池魚は故淵を思ふ」である。野崎（一九七八）も「行く春や……」の句が陶淵明の「田園の居に帰る」を踏まえていると思われる」と述べている。

私が陶淵明の「田園の居に帰る」に依拠する理由は、この詩が鳥と魚の二つを対象にしているからである。一羽旅に出て、他郷に住み着いた鳥は、旅立った故郷の林を思い出す。あるいは、渡り鳥が故郷を離れ、旅の途中で故郷の林を思い出すのかもしれない。池のなかの魚は、昔泳いでいた故郷の水を深くたたえたとところの川を思い出す。あるいは川を渡ってきた魚は、出発してきた故郷の川を思い出すのかもしれない。どちらも詩作者が、鳥や魚に自己自身を投影して、故郷を思う気持ちを詠んだものである。先の『文選古詩』の「王鮪懷河岫、農風（鷹ヲ云）思北林」も同じような気持ちであろう。

東北という未知の地への旅に出发した芭蕉も、故郷の江戸深川の町とそこに居住する多くの知人と人々を思いだして、自然に涙が目から溢れ出てならなかったのではないだろうか。

六、二 漢詩の影響と「目は泪」か「目に泪」についての麻生（一九六二）の解説

麻生（一九六一）『奥の細道講読』の漢詩の影響と「目は泪」についての解説を、以下に引用する。

「句解」行春や鳥啼き魚の目は泪

「『行く春』が季題である。過ぎ去ろうとする春、の意。晩春。『行く春や』の『や』は切字。詠嘆の助詞。おりから旧暦三月下旬で、春も暮れて逝こうとしている。春が去り行くのを惜しんで、鳥は悲しげに啼き、魚の目も涙でうるおっているように見える、という句である。惜春の情を、心なき鳥や魚にまで移入して詠みあげているのである。

『鳥啼き魚の目は泪』というのは奇抜な表現であるが、この句については古来さまざまな典故があげられている。例えば、杜甫の「春望」の詩句「感時花濺淚、恨別鳥驚心」や、陶淵明の『帰田園居』の詩句、「羈鳥恋旧林、

池魚思故淵』や、『古今集』の読み人しらずの歌『鳴き渡る雁の涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露』や、『述異記』の『南海中有鮫人、室水居如魚、不廢機織、其眼能泣、則出珠』などがあげられている。これらの詩句が、芭蕉の血肉となつて、この句に影響しているとはいえずうが、そのうちのどれがこの句の典故であるときめることはできないし、またその必要もない。

下五の『目は泪』は、『安達太郎根』（渭北編）には『目に涙』とある。『目に涙』では、一雫の涙をたたえているように聞こえてよくない。『目は涙』とあるので、眼一ばいに涙の溢れるさまが印象的にはつきり感ぜられるのである。『魚の目は泪』という奇抜な表現については、千住の魚市の魚から着想したのであるうとか、上陸の際に魚商の魚を見たので、こういつたのであるうとか、いろいろの説があるが、そこまで穿鑿する必要はあるまい。魚の目を見ると、實際泣いていたようにうるんでるので、その印象が芭蕉の頭に残っていて、こういう表現をとらせたとはいえるかも知れない。

この句は惜春の情をよんだものであるが、もちろんそれだけではなく、見送りの人々に対する惜別の情がこめられている。何丸の『芭蕉翁句解大成』（内題『芭蕉翁

句解参考』天保元年自序）に引く一説、『一書にいふ、元禄二年奥の細道留別の句にして、跡にとどまるものを魚に比し、みづからは鳥に比して、別れのまことをつくされたり』とある。見送る人々を魚に、芭蕉を鳥に比したというように、区別するのは考え過ぎであるが、この句が離別の哀傷と結びついていることは確かである。『行く春』という言葉には、奥州へ旅に行くという気持ちに託せられているように思われるのであつて、旅に行く人も、それを見送る人々も、一しよになつて涙を流しているさまが、髣髴と描き出されているのである。

はじめから比喩的な観念が存して、それを一句にしたというのは、いい過ぎであろうが、惜別の悲しみをそのまま魚鳥の情に託したとはいえるであろう。句のモチーフは惜別の情であつて、惜別の情を惜春の情に移し、その惜春の情を『鳥啼き魚の目は泪』という生き生きとした具体的な姿で表現したのである。芭蕉は常にこういう象徴的な表現を得意としている。（麻生磯次 一九六一奥の細道講読 明治書院 三〇―三二頁）

六、三 「目に涙」について

涙を流すのが魚ならば、「魚の目に涙」とするのが普

通であろう。明らかに誤植と思われる資料として、角川書店編(二〇〇一)『ビギナーズ・クラシックス』おくのほそ道(全)』においては、後半箇所「蛤のふたみに別れ行く秋で」の解説において、「この句は、『旅立ち』の章の『行く春や鳥啼き魚の目に涙』と対比されることが多い。」(二二三頁)とある通り、「目は涙」ではなく「目に涙」と掲載されている。校正時点で見落としてしまったのは、校正者の単なる偶然とは思えない。芭蕉があえて「は」としたのは、推敲時点において、『魚の目に』ではなく、芭蕉自身の涙として「目は涙」の「は」を選択したものと思われる。

なお、山本(一九五九)は『安達太郎根』には『目に涙』とあるが、これでは句のリズムが弱まり、説明的になる。誓子は音調の上から、『や』と『は』がここでは『激しく競合する』といっているが、私はそうは感じない。」(二六二頁)と述べている。

資料の『安達太郎根』については岩手大学附属図書館の相互貸借でも現在入手困難なために、「に」と「は」の違いについては確認することができなかった(東京大学竹冷文庫の板本にある)。あるいは芭蕉の原文を弟子が転記する際に、間違えた可能性もあるかもしれない。

七、執筆時期の問題点(旅先の執筆時または帰郷後の推敲時といった作句時期の問題点)

芭蕉は元禄二(一六八九)年三月下旬、『おくのほそ道』の旅に立ち、約五カ月の間、奥羽・北陸を旅行し、八月二十一日頃大垣に到着した(井本 一九六八、二三九頁)。この句は、出発地の千住で詠んだというよりも、むしろ千住を遠く離れた東北の旅の途中に、または帰郷後、『奥の細道』の執筆と推敲時に練られた句ではないかと思うのである。

執筆時期の問題、つまり芭蕉が出発地の千住で読んだとはどうしても考えられないことと合わせて、過ぎ行く春に、鳥の鳴き声にはつとして、さらにまた魚がその故淵を思い出すことにかんがみて、芭蕉は漢詩にある鳥や魚でさえ故郷を思う気持ちを思い出して、いわば自身の郷愁の思いにはつと気づいて……まさに絶句状態になつて、芭蕉自身の目から涙が留めなく溢れたのではないだろうか。

つまり、そこでは、陶淵明の漢詩を芭蕉が思い浮かべたと想像することで、むしろこの句は、千住という地だというよりも、千住から、だいたい離れた地、あるいは奥

の細道の旅を終えて、芭蕉の旅の出発時をしみじみと振り返って詠んだものと解釈できるのである。

言い換えると、故郷の江戸深川を遠隔地で思い出して、つまり出立してきた第二の故郷である江戸を思う気持ちに打たれ、芭蕉自身が涙を流したものである、と解釈できるのである。

井本（一九六八）は、『おくのほそ道』の完成時期について、以下の通り述べている。

『おくのほそ道』をいつ執筆したかは正確にはわからないが、草稿を曾良が筆写した曾良本『おくのほそ道』の成ったのが元禄五年六月以後であることは明らかであり、恐らく元禄六年の後半に、ある程度までの推敲が進められたと思われる（拙稿『曾良本おくのほそ道の研究』）。この夏から秋への閉関の間にも『おくのほそ道』の執筆と推敲は進められたと見てよいのではないか。

大体芭蕉は、自分の作品に何度も何度も手を入れる型の作家である。発句もそうだが、文章もそうである。『幻住庵記』にしても、何度も何度も書き直し、去来や凡兆等の意見を聞いては取り入れている。紀行の執筆態度も同様に推敲に推敲を重ねている。紀行の場合には、旅中とところどころの短文をまず執筆し、それがあつた程度た

まったところで、それらの短文を基礎にして執筆を進めた形跡がある。

だから、『おくのほそ道』のような長文の紀行は、かなり長い歳月をかけて書いたものと考えられる。おそらくは、江戸へ戻って来て、ようやく生活が落ち着いたら、元禄五年頃から、折り折りに筆を進め、元禄六年の後半に一まずまとめ、更に七年のはじめまで推敲を続けたとみてよいのではあるまいか。

曾良が特に許されて『おくのほそ道』を筆写したのは、彼がその旅の同行者だったからに相違ないが、曾良が写したあとも、芭蕉は更に推敲を加えている。芭蕉が曾良に筆写を許したのは、一応完成したと思ったからであろう。未完成のものを写させるはずがない。従ってその筆写の時期は、素竜筆写本のできる元禄七年初夏以前であることは確かだが、またそれより余り遠くさかのぼるとは思われない。せいぜい数カ月であろう。曾良は元禄六年秋から翌年まで江戸にいて、芭蕉の身辺に近かつたと思われるから、おそらくその頃に筆写を許されたのであろう。

いずれにしても『おくのほそ道』が、旅行直後の執筆ではなく、旅行後数年たってからの執筆であり、しかも

その間に、作風の上で大きな転回があったことは記憶すべきである。元禄三、四年の時期に、芭蕉が新風を志したことについてはすでに述べた。また、『笈の小文』の未定稿が、元禄四年頃に執筆されたことについても述べた。それらを踏まえて『おくのほそ道』が執筆されたことに留意しなければならない。(井本農一 一九六八 芭蕉Ⅱその人生と芸術 講談社 二〇九―二一一頁)

井本は、紀行文『おくのほそ道』を芭蕉が文学として創造した作品であると位置づけており、「文学としての紀行を書くのだから、必ずしも、旅行直後、記憶の薄れないうちに大急ぎで書く必要はなかった。旅行中の気持ちをおのまま書きこむのではなく、紀行執筆時の作者の胸中のものが盛りこまれる。旅の事実通りである必要はなく、旅の事実を素材にした創作になって行く。(二二二―二二四頁)・・・(引用者が途中を省略する)

紀行中の発句にしても、例えば『五月雨の降りのこしや光堂』の句ができたのは、旅行中ではなく、『おくのほそ道』執筆時で、しかも曾良に筆写を許した後に、『五月雨や年々降も五百たび』の句を直して、前掲の形に改めたのである。だから、『光堂』の形の句ができたのは、元禄六年末か元禄七年になってからであろう。こ

のような例はまだ外にいくつか考えられる。例えば、私には『行春や鳥啼き魚の目は泪』とか、『田一枚植て立去る柳かな』なども、旅行中の作ではなく、執筆時の作ではないかと考えるものだが、今は考証を省略する。(井本農一 一九六八 芭蕉Ⅱその人生と芸術 講談社 二二五―二二六頁)

八、解釈を指示する芭蕉の郷愁への思い

八、一 文脈からいえる芭蕉の泪

「行春や鳥啼き魚の目は泪」の句は、「千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ、胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ」とある通り、涙を流したのは芭蕉自身である可能性が高い。一説には、芭蕉を送りに来た人々を含むものもあるが、文脈からすれば、この句の中の泪は芭蕉自身の泪であると解されるのである。

八、二 慣用表現「魚の目」の連結へのこだわり

発音が「ウオノメ」であり、足の裏にできる豆粒の「魚の目・鵝眼」と連結した音にも似て、「魚」と「目」の

強い連結に支配されてか、「行く春や・・」の句を「魚の」でいったん区切ることが大変難しいのかもしれない。あるいは、ウオノメができるほど、旅は厳しかったのであろうか。

八、三 芭蕉の真意としての郷愁の思い

生まれ育った故郷を離れた者のみが、故郷を恋しく思う気持ちを知っている。芭蕉の郷愁の思いを鳥の出でくる漢詩に例えるならば、王讚詩の「人情旧郷を懐い、客鳥故林を思う」（人の自然な心として故郷がしたわれてならないが、それは巢を離れた鳥がもとした林を思うようなものだ）（大島晃編 二〇一一 中国名言名句辞典 新版 三省堂 四六八―四六九頁）ではなかったであらうか。

芭蕉は、生まれ育った故郷の伊賀上野を思い、第二の故郷である江戸深川を思い、漂泊の詩人として「旅に病んで夢は枯野を駆け廻る」のであろう。

九、おわりに

俳句の解釈は自由にできるものと思う。本当の意味は

作者である芭蕉自身に聞かなければならないだろう。意味の解釈が専門家である歌人に限定されるはずはない。一つの俳句の解釈を、漢詩の知識を前提にして可能であることを示す例として、従来とはやや異なる芭蕉の気持ちを解釈してみたのである。読者には俳句のしろうとである私に対して批判もあるだろうが、ご容赦願いたい。

参考文献（ABC順）

麻生磯次 一九六一 奥の細道講読 明治書院 三〇―

三一頁、

萩原恭男校注 一九七九 芭蕉おくのほそ道・付曾良旅

日記奥細道菅菰抄 岩波書店 一六七頁、

井本農一 一九六八 芭蕉とその人生と芸術 講談社現

代新書一五一、一四四頁、二〇九―二一六頁、

稲賀敬二・竹盛天雄・森野繁夫監修 一九七八 増補改

訂新訂 二〇〇三 総合国語便覧 教育図書出版

第一学習社 一六六頁、

角川書店編 二〇〇一 ビギナーズ・クラシックス『お

くのほそ道（全）』角川書店、

野崎典子（築瀬一雄監修） 一九七八 おくのほそ道（全）

古典新釈シリーズ二三、八一―九頁 中道館、

- 小倉肇 一九八三 少年少女伝記読みもの松尾芭蕉
さ・え・ら書房 一二八頁
- 大島晃編 二〇一一 中国名言名句辞典新版 三省堂
四六八―四六九頁
- 三省堂編集所編 一九九九 三省堂版教科書学習高等学
校古典Ⅰ古文編(発行元 三省堂・発売元朋友出
版) 二三二―二三三頁
- 内山一也 一九七六 鑑賞奥の細道 笠間書院 一四
二〇頁
- 山本健吉 一九五九 芭蕉上巻 新潮社 二五八―
二六三頁
- 山本健吉(鈴木勤編) 一九七五 奥の細道 日本の古
典Ⅱ グラフィックス版世界文化社 一四―一六
頁